# 新刊批評

## 淨土の觀念　金子大榮氏著

本書は、師の深き思想と體驗とによつて、標題の示す通りに、淨土の觀念を明らかにせんとして、發表せられたものである。由來淨土教は、やゝもすると近世に於ける思想的傾向に押し流されて、その名の示してゐる淨土といふ觀念は、殆んど內容を持たぬもの、若くは哲學的思辨によれる單なる理想といふが如きものとして考へられ、隨つて、往生思想といふ如き宗教的宗教思想が、何らかの意味に於いて、他の思想的背景に置き代へられなければ、一般的意味及びその宗教的價値が見出されないものゝ如くなされ勝ちになつて來てゐる。茲に師は宗教的信念の對象として若くは根據として、「佛」が意味を持つやうに現實の世界に對する宗教的反省によつて、現實の世界を超へた一つの天地として淨土といふものが、直接的に何らかの意味を持たねばならぬといふ宗教的要求から、更らに進んで、國家とか社會とか教界とかいふものゝ存在しなければならぬ基礎若くは根據の上に、淨土といふものを見出し、佛教經典に於ける淨土といふものを、眞面目に批判し意味づけ、體驗せられたそのものゝ發表が本書となつたのである。

本書はもと、京都に於ける日本佛教法話會の囑に應じて、三回に亘つて、講演せられたものゝ速記錄であるが、その講演の速記錄であるが故に、記述の冗漫や文獻指示の不充分やは、決して本書の發表價値に何らの不滿を與へるものでなくて、本書の性質上「其所にまた講演ならでは到底現はれぬであらうと思はるゝ或るものあるを見て慚愧に堪る會心を感ずる」と著者自ら「序」に云はるゝことは、そのまゝ讀者の會心となるであらう。

本書の內容を少しく紹介をするならば、先づ初めに「自覺に現はるゝ淨土」といふ項目をかゝげて、世親の淨土論に於ける表白によつて、一心の上に現はるゝ歸命と願生との二行が必然的に「我」に對立して「佛」と「淨土」とを生み出すことを說いて、そこに觀念としての淨土がそのまゝ眞實の實在であることを述べんとしてゐられるのである。次に「大乘經に於ける淨土の觀念」と名付けて、その中、華嚴經等によつて、「觀念界としての淨土」を、般若經等によつて「實現の理想としての淨土」を、大無量壽經等によりて「願生すべき實

在界としての淨土」を說いて一々鋭い批判と意味づけがしてある。最後にこれら大乘經典に於ける淨土思想の總評と師自身の考へとを結論して、「觀念と實在」「實現か願生か」の二項目を以て、本書を終らしめてゐられる。されど本書の內容はその分類序列よりも師の明らかな論理によつて、明瞭にその一々この解說がひし〳〵と讀者の心弦に迫るところに、師の著述の價値があるのである。故に師の觀念論的解說は、師個人の獨斷論ではなくして、師の全人的體驗內容であつて、師は本書中に「淨土々々と云つて求めて來た所の淨土は、本當の意味に於いて無爲涅槃界である。本當の意味に於て觀念の世界である。さう云ふ意味の觀念の世界は本當の意味に於いて實在の世界でなければならぬ。」といふてゐられる。こうした立場に於いて、新たに淨土といふものを考へ直して、從來の淨土敎の淨土にほんとうの意味を見出さんとせられた努力は、佛敎界の偉彩である。眞宗學の重要問題としても、佛敎學の一問題としても、こうした立場に於いて、考へられるといふことは、その學的意味を持つ上にも、宗敎的意義を見る上に於いても、宗敎界に重要なそうして根本的な刷新と生氣とを支へることを信ずる。

ここに、近時、敎會とか宗門とか云ふものゝ、存在の意味が見失はれ、敎會や宗門の維持が單なる政策や習慣のみで辛じてその形のみをとゞむるといふが如き狀態に置かれんとしつゝある狀態に對して、若し著者に云はしむれば、恐らく、「淨土の觀念」の明瞭を欠くが所以であると、いはれるだらうと思はるゝほど、本書は、また、敎會及び宗門の存立根據に充分なヒントと指示とを與へんとしてゐられることは、見のがしてならぬ、本書の特徵であらう。

（京都文榮堂發行定價壹圓參拾錢）（一悟）

## 弘法大師圖像考

水原堯榮著

我々は今日宗敎の純化に勉めなくてはならぬ。卽ち、あらゆる神話的要素は神話學に、傳說的部分はそれ自體に還元し、そしてあらゆる迷信的習氣をば宗敎の領野より遊離せしめなくてはならぬ。更らに我々をして忌憚なく言はしむれば、現代眞言宗の俗信仰ほど最も迷信的色彩の濃厚なものはあるまい。たとひ、その敎旨が現實卽理想、卽事而眞、當相卽道であつても、現實を曲執するの極は却つてデカタンとなり、事の當相に陶醉してはいよ〳〵密敎の根本理想たる肉身成道に違反するのみならず、徒らに淫靡溶々世道人心を亂すこと甚しくなるであらう。そのため眞言宗は世俗から

極めて誤り見られてゐる。この點は確かに我が密教の特長であり同時に缺點であつた。また直接にせよ、間接にせよ弘法大師の宗教に關係ある我々は之が改善に懸命の努力をはらはなくてはならぬ。然るに今此處に水原堯榮師を得た。師は直接學究の職を奉じてをらるゝのでなくして、敬虔なる高野山大師本廟の守護僧である。而かも最も傳說と因襲の囮に陷り易い位置に處し乍ら、內心に燃ゆる大師復古の信念は既に身業にあらはれて此の快著となり、語業に發動しては「世にはお大師さんと申さば加持祈禱の本尊さんのようにながしめに見られてゐるのが多いがこれは世の賣僧達がかつぎまはる大概低級な頭のもち主を支配することに腐心してゐる自然の力がとかくかく觀られるやうになつてゐるが、これがお大師樣に對しての報恩であらうか。」と叫ばしむるに至つた。その內容についてはその是非は私には分らぬが、先づ氏は眞如式と榮海式との二系統あることより、御遺告書を中心として顯はれた影像變遷の種々、內證本質を忖度して書かれた影像、として最後に傳說より描寫された影像として鯖、めひき、廿日、厄除くさり、子安大師の因緣と批判的考察が試みられてゐる。史家は之れによつてその變遷發達を知るべく、圖家はその何れが眞像なるかを解すべく宗教家は之れを試金石として玉石混肴の現代密教をして純なるものたらしめることが出來る最も價値ある書籍である。敢て一本を座右に置かれんことを勸む。

（東京丙午社、定價金參圓也）（藤井周）

## 彼岸の世界

金子大榮著

「彼岸の世界」が刊行せられた、恐らくそれは金子氏かねての念願であつたであらう。曩に佛教概論において、その佛教研究に對する態度を定められて以後今日に至るまで氏自身既に序に記さるゝ如く實に佛教概論といふ氏の獨創的見解になつた佛教一般の考察檢討より淨土教といふ特殊教門の研究に進むべき過程の教示である。

かるが故に佛教概論より出でゝ淨土教の研究に入るといふ氏の言葉は佛教一般より發生的に特殊淨土教を演繹するといふ意味ではなくして淨土教自體が佛教一般の根柢をなすものでなければならぬといふ見解卽佛教に於ける淨土教成立の論理的基礎付けと解するの妥當なるを思ふものである。何となればその開卷における彼岸の世界を以つて宗教生活の論趣と立論せるを見ればすべての宗教生活者はこの世界を思慕しなければならぬ宗教生活は何等かの形においてかゝる思慕を

以つて始めらるべきであるといふ意味において彼岸の世界は宗教生活の本質的要素である。この一般的見解に佛教といふ特殊現定を與へて觀察せるものが卽ち淨土である。

佛法僧の三寶を以つて佛教々團の成因とせられた而してこの三寶中法を離れて師なく法を離れて僧なきが故に法寶こそは佛教の根本的生命であらねばならぬかるが故に淨土も亦一つにこの根本的生命たる法寶によつて生るものである、法の世界は理念の世界である。僧にしてこの理念の世界を憶念するものは菩薩でありこの菩薩によりて建立莊嚴さるもの是卽淨土である而してこの菩薩の建立淨土莊嚴淨土の大行を生み出すものそれが卽ち菩薩の本願である而してこの本願はその反省に於ては龍樹の所謂儚弱怯劣として願生歸命の形となり理想においては丈夫志幹の形となつて淨土實現の願に燃ゆるのである而もこの兩面は各別のものと考へられてはならない、何となれば儚弱怯劣といひ罪惡深重といふ內省の外に莊嚴淨土の大行があるべきではないから莊嚴淨土の內容に眞實の宗教的意味を附與するものは唯一罪障重くして無救濟なりといふ自覺のみである。歸命の精神のみが眞實淨土を建立するのである。



淨土莊嚴—淨土實現の大行はすでに云へる如く菩薩の本願から生れる而るに願は淸淨意欲を體とする淸淨は智慧によつて可能であり意欲は慈悲によりて生る、故に願の內容は悲智の二門である—この義は第三章に詳し、更にまた氏は世親の願生歌によつて淨土願生者の行を示されてゐるこれ所謂五念門であるかくてこの五念門は淨土往還の路であつて前四の禮、讃、作、觀によりて淨土に入り廻向の門によつて淨土より出で、此土に向ふのである。

然るに作願は世親もいへる如くに止卽定をその本質とするものであり、觀察は觀卽智慧をその本質とするものである。故に淨土往生の行も亦智慧である更に淨土に入るものは第五の廻向によつて淨土より出で、此土に向ひ苦惱の現實に入りて衆生の苦惱を荷負するもの、氏の後編第四章に云はる、代受苦の行に出づるべきであるこれ卽大悲である。

かるが故に彼岸の世界に往生するものは禮拜によりて佛に歸命し讃嘆によりて佛の名義に相應しつゝ智慧もて作願視察し、廻向によつて大悲を行ずるものにのみ可能であるかゝる意味において前に示せる淨土實現の理想果遂の行たる菩薩の大願卽悲智はまた願生淨土の行者の大行たる五念門と相離るゝものではなくし

てはからずも奇しき一致を示すのである。本書はこの間の消息を物語つて充分である以上要約するに本書の問題とする所は序論第二の最後に氏の示さるゝ願生淨土と莊嚴淨土の二面がいかに統一さるゝかに歸するであらう。

唯罪惡深重の自覺こそ人生最深の問題の祕鑰である。

（東京市神田岩波書店發行　菊版定價貳圓參拾錢）

（K　D　生）

# 彙報

## 佛教學第一研究室報

□四月三十日午後七時より第七回研究學會を開催す

法然・證空・行觀の念佛定散關係論について

上杉慧岳教授

選擇集によつて定散二善と明かに區別せられた念佛の意義が其後漸次變化して、證空、行觀に至つて念佛の內容が問題の中心となり。定散の思想が念佛自體に含蓄せらるゝにいたる思想史上の經過發展を氏獨自の立場から二時間餘に涉りて批判的な長廣舌をせられた。參會者、教授並に學生多數。

□五月十五日(月)午後七時より第八回研究學會を開催す。

稱名報恩について

稻葉圓成教授

蓮師の稱名報恩說の根據を宗祖に求め且つ蓮師の稱名が必しも報恩このみ取りきつて居ない點について文證等を擧げ、要するに蓮師は、宗祖の思想を發展祖述せし忠實な傳燈者であることを高唱せられた、後茶話會の席上質問應答に隨分と賑つた。參會者多數。（物部助手）